

自由応募分科会 4 アジア太平洋秩序とチャイナ・ファクター

報告 1

浅野亮(同支社大学)

「米中対峙下におけるアジア太平洋秩序の変容と中国」

米中対峙下における「地域秩序の変容」についての分析の多くは、東アジアやアジア太平洋などの地域を前提としてきた。しかし、変化は、秩序だけでなく、地域や変容の中身にも及び、しかもそれらは相互に連動してきた。このような現実の変化のメカニズムの解明の試みにより、分析手法も変化してきている。

地域の変化は、範囲の拡大で示される。元来「東アジア」は今の東北アジアのみを指したが、現在では東北アジア+東南アジアを指し、アメリカの役割を重視してアジア太平洋ということもある。最近では、南アジア(インド太平洋という括りもある)や中央アジアも(再び)実質上含まれるようになった。中国と ASEAN 諸国の関係もこのような地域構造の拡大変容の中で展開している。「一帯一路」が示すように、中国の経済力や軍事力の増大を背景とする「拡大アジア」が形成中のように見える。

地域秩序が重層的(multi-layer)とは、政治、経済、軍事などの異なる分野やそれぞれのインシューごとに協調と対立という相反方向のベクトルが共存し、一つの政策にも協力と掣肘という矛盾する性格が混在し、全体の評価が著しく困難ということである。しかも、その分野間の分断は固定しておらず連動し、それも濃淡がダイナミックに変化している。重層性は経路依存性が高く、事象の発生順序で結果はかなり違う。

以上のような特徴を持つ地域枠組みの変動の主因は中国と考えられる。「溢れ出る中国」(川島真)もその前提に立ちながら、他地域との連動が十分にコントロールできていない現象を述べている。

システムの転換期では、「冊封・朝貢体制」や儒教を含め、「創られた伝統」による正統性の主張が起こってきた。実際には ASEAN 諸国のほとんどは儒教を採用せず、朝貢も行わなかった。中国は伝統的観念に代わる普遍理念の創出を模索している。